

重ねた実績、品質の証し



昔ながらの織機で金網を織り込む。線材が幾何学的な模様を紡いでいく
＝山形市鑄物町

金網を織り込むための機材が並ぶ工場内

ニーズに応え、技術を蓄積

汎用（はんよう）性の高い金属製品の一つでもある金網。フェンスや焼き網などで家庭生活に溶けこむ一方、のり面の保護網や機械用など産業分野でも幅広く活用されている。見えない部分に用いられることが多く、「主役」とまではいえないが、さまざまシーンで欠かせない「名脇役」といえるだろう。

■幾何学的模様紡ぐ

山形市鑄物町の西部工業団地に立地する長岡金網工場。施設の一部で織機の音が鳴り響く。垂鉛めつき鉄線などの線材は紡績糸のように縦と横に織り込まれ、整然と幾何学的な模様を紡いでいく。昔は手作業だったが

今は機械が主流。それでも経験に裏打ちされた技術は品質に反映される」と長岡茂隆社長（62）。品質へのこだわりは確かな技術として取引先の信頼を勝ち得るとともに、「社齡」を重ね続ける原動力にもなっている。

金網製造は1869（明治2）年からとされる。それ以前は山形市宮町地区で染物屋を営んでいたといわれ、「祖先が伊勢参

滞りの際にこの仕事に目を付け、滞りながら技術を覚えてきたことが今につながっていると伝え聞いている」。長岡社長が社史を

ひもとく。

亀甲網やひし形網、平織り網、クリンプ網など種類はさまざま。フェンスならひし形網、防鳥網や畜舎向けなら亀甲網などと用途によって使い分けられるため、得意分野を専門的に手掛けることで経営が成り立つ企業もあるほどだ。

■万能性重宝がら

一方、長岡社長は「うちの場合は各種製品を満遍なく製造できることが強み」と強調する。創業時は同業者が少なかったこ

ともあり、多くのニーズに応えられるよう幅広く技術を蓄積してきたことが、今につながっているという。得意分野を極める業者が多いからこそ、万能性は重宝がられ「結構な割合で同業者から注文をいただいている」。業界で認められた実績は実力の証しでもある。

「太平洋戦争中は窓ガラスの代用品を手掛けていたとも聞いている」と長岡社長。物資が不足した時代を物語るエピソードだ。高度成長期の真つただ中の1964（昭和39）年に会社は法人化。時代の変遷に合わせ、創業の地の宮町地区の周辺は宅地開発が進み、「人口密度が高まり新たな作業場が必要となった」。87（同62）年、現在地に工場を移設した。

重要なのはアクシデントへの対応。ノウハウ構築に3～5年

- 創業からの歴史
- 1869（明治2）年創業 金網業者として
 - 1964（昭和39）年 法人化
 - 1987（昭和62）年 現在地に移転
 - 2008（平成20）年 長岡茂隆氏が社長就任

機械により線材が織り込まれ金網が生みだされる。手作業より効率的な上、製造工程も単純だが、「重要なのはアクシデントへの対応。製品の不良化や機械の不具合への対応ノウハウを構築するまで3～5年はかかる」と長岡社長は説明する。その上で「経験しなければ感覚は

創業家の分家に当たる長岡社長は6代目という。3代目の伯父、4、5代目のいとこが担った重責を2008年から背負う。「社長になるとは思わなかったから事務系の仕事は覚える

■販路開拓と継承と

「私をい人に」との思い。企業員あつを一致にきいて長岡はいえ重ね重い。

のに必東北



太平洋戦争中に発資料を手にする長岡



火花を飛び散らせながら溶接作業に取り組む従業員